



国際湿地都市
NIIGATA

新潟市の小さな5つの潟

内沼潟・六郷ノ池・北上の池・金巻の池・ドンチ池

ガイドブック



内沼潟



六郷ノ池



金巻の池/水戸際池



北上の池



ドンチ池

目次

- | | | | | | |
|------------------|---|--------------------|----|--------------------|----|
| ◆ 位置図…………… | 1 | ◆ 北上の池の生い立ち…………… | 6 | ◆ 潟の伝説…………… | 18 |
| ◆ 内沼潟の生い立ち…………… | 3 | ◆ 金巻の池の生い立ち…………… | 7 | ◆ 地域の関わりや取り組み…………… | 22 |
| ◆ 六郷ノ池の生い立ち…………… | 4 | ◆ ドンチ池の生い立ち…………… | 8 | | |
| ◆ 押堀(落堀)とは…………… | 5 | ◆ 5 潟の動植物相の概要…………… | 10 | | |

内沼潟・六郷ノ池・北上の池・金巻の池・ドンチ池

本ガイドブックで紹介する潟は、民有地で駐車場などの施設がありません。また、住宅地と近接している所が多いため、見学にあたっては住民の方々の迷惑にならないよう、十分注意してください。



内沼潟



六郷ノ池



金巻の池/水戸際

位置図

【澤口晋一】



新潟市16潟ガイドブックの6冊目は、面積の小さな潟を5つ取り上げました。これらの潟は福島潟や鳥屋野潟、佐潟などと比べると形成された時代が格段に新しく、ほとんどが江戸時代以降です。その生い立ちについても干拓、河川の破堤による押堀、人為的な掘削によるもので、上記の3潟とはその性格が大きく異なります。しかし、小さな潟には小さな潟ならではの意外な個性があります。このガイドブックでは、5つの小さな潟に光を当てます。

内沼潟

所在地:北区内沼
面積:約1.15ha
水面標高:-0.6m
成因:干拓残存湖

本ガイドブックで取り上げる水域のうち4つは、その名称が「～池」ですが、すでに池を含めて「16の潟」という言い方が定着していることから、総称として記す場合には「潟」と表記します。

六郷ノ池

所在地:秋葉区六郷
面積:約1.6ha
水面標高:6.5m
成因:派川跡

北上の池

所在地:秋葉区北上
面積:約0.2ha
水面標高:4.3m
成因:押堀(落堀)

金巻の池(水戸際池)

所在地:西区木場,金巻
面積:約0.7ha
水面標高:0.1m
成因:押堀(落堀)

ドンチ池

所在地:西区中権寺～谷地
面積:約0.3ha
水面標高:2.6m
成因:人為掘削



池



北上の池



ドンチ池

5潟の生き立ち

内沼潟

【澤口晋一】

内沼潟は、江戸時代中期から始まり国営干拓事業が完了するまでの240年以上¹⁾にわたる福島潟の干拓史のなかで残存してきた水域の一つです。

図1は福島潟の干拓の進行状況を時代ごとに示したものです²⁾。図から、干拓は潟の外周部分から始まり次第に潟の内部に及んでいったこと、干拓が最も進んだのは1790(寛政2)年からの「十三人衆」とそれに続く新発田藩による藩営開発によるものであることがわかります。

十三人衆がいっそう干拓を進めるために築いた山倉新道、飯塚堤あるいは浜茄子新道によって、後に内沼潟(新開沼)、黒山潟(小潟)と呼ばれるようになる水域が福島潟本体から切り離されました(図1)。これら二つの潟は、結局江戸時代に干拓されることはなく、それが完了するのは戦後になってからです。

ところで、現在内沼潟と呼ばれている潟は、戦後干拓された内沼潟(新開沼)の一部が残ったものとこれまで理解されてきました³⁾。しかしそれは間違いのようです。図1、写真1、2から明らかなように現在の内沼潟は江戸時代の干拓地の中にあり、戦後干拓された内沼潟(新開沼)とは関係ありません。

なぜここ(現内沼潟)が干拓されずに水面として残されてきたのか、はっきりしたことはわかっていませんが、近隣の人たちの漁労の場としての意味が大きかったと考えられます。実際に1980年代まで延縄などによって魚獲りが行われてきました。内沼潟という現在の名称については、潟のすぐ近くに内沼沖という集落が位置していたことと関係があるように思われます⁴⁾。

現内沼潟は、もとは面積が約4.45haほどの釣り針のような形をしていましたが、1995年から埋め立てられて現在は、1.15haほどの面積になっています(写真1)。

なお、福島潟の干拓史については、本シリーズの『福島潟ガイドブック』(2024年発行)を参照ください。

- 1) 福島潟の干拓は、阿賀野川河口の松ヶ崎掘割の決壊(1731年)で周辺の排水が進んだことをきっかけに始まり、国営干拓が終了したのが1976年であることを踏まえて240年以上とした。
- 2) 大正3年発行の1/2.5万地形図:「水原」「天王」「松ヶ崎濱」「新発田」の各図幅に新潟市北区役所地域総務課による福島潟開発状況図を重ね合わせて筆者が作成した。
- 3) 例えば、『とよさか歴史散歩』第2版(1995年)。
- 4) 「内沼沖」は、明治44年時点では図1、写真1に示した場所の集落名であった。

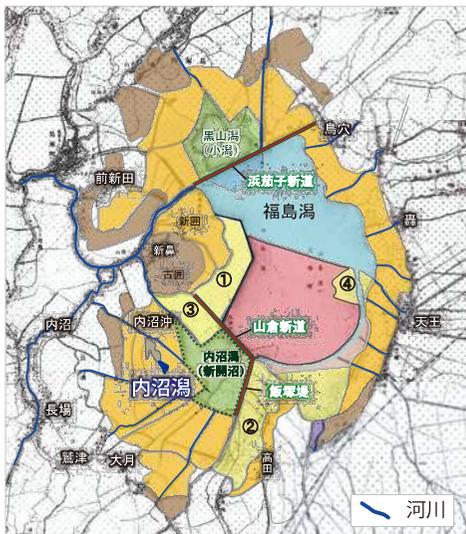


図1 福島潟の干拓

近世	■ 山本丈右衛門の干拓 (1755年～)
	■ 十三人衆及び新発田藩の干拓 (1790年～)
近代	① 新々團干拓 (1886年～) 弦巻七十郎
	② 梅雨湖干拓 (1886年?～) 弦巻七十郎
	③ 山倉團干拓 (1911年～) 市島徳次郎
	④ 市島團干拓 (1937年～) 市島家
現代	■ 内沼潟(新開沼)干拓 (1948年～)
	■ 黒山潟(小潟)干拓 (1954年～)
	■ 国営干拓 (1966年～1976年)



写真1 内沼潟の形状



写真2 旧内沼潟(新開沼)と現内沼潟

阿賀野川は五頭山地と菅名岳の間を抜けて平野に出た所から下流側約20kmの区間に蛇行跡が数多く残されています。その蛇行跡をみると阿賀野川は旧水原町を東北端として次第に南西側に移ってきています。その様子は図1に示した河道の変遷からもよくわかります。

さらに、この図をよくみると大変興味深いことがわかります。それは、1724（享保9）年頃には阿賀野川の河道は水ヶ曾根の東側に位置していましたが、1911年には河道が西側に移動して、地続きだった水ヶ曾根と六郷の集落が阿賀野川を挟んで対岸に切り離されてしまっていることです。この河道の移動は1737（元文2）年の洪水によって生じたものであることがわかっています¹⁾。

六郷ノ池は、阿賀野川左岸（新潟市秋葉区）に位置する長さ約400m、幅40m、面積1.6haの細長い形の池で、阿賀野川の河道跡（蛇行跡）にできた池とされてきました²⁾。しかし、上記の河道変遷からみてもわかるように、六郷ノ池は阿賀野川本流の河道とは関係していません。

六郷ノ池は地形的には蛇行州と呼ばれる地形上に位置しますが、1914（大正3）年発行の地形図（図2）を

みると、もともとは細い河川であったことがわかります。その河道らしき跡を、土地利用も考慮して地形図上で追っていくと、新郷屋と金屋の間を抜けていくようにみえます³⁾。

写真1はカムチャッカ半島中央部を流れるカムチャッカ川の様子ですが、本流から分岐した河川が蛇行州を横断するように流れているのがわかります（赤の矢印）。こうした現象は早瀬切断と呼ばれ、蛇行河川では普通にみられる現象です⁴⁾。地形的にみて、六郷ノ池も早瀬切断による派川を起源とするものと考えられます。形成時期については明確にはわかりませんが、阿賀野川本流の河道の位置等から、上述した1737年の洪水以降とみてよいと思われます。

- 1) 北陸地方建設局・阿賀野川工事事務所（1988）『阿賀野川史-改修60年のあゆみ-』. 898ページ.
- 2) 新潟市湯環境研究所編（2018）『みんなの湯学』. 127ページ.
- 3) 阿賀野川水害地形分類図（1984）
- 4) 明治45年発行の1/5万地形図：「新津」図幅には、論瀬新田～清瀬の間の蛇行州上に早瀬切断による派川が描かれている。21ページ（補足）参照のこと。

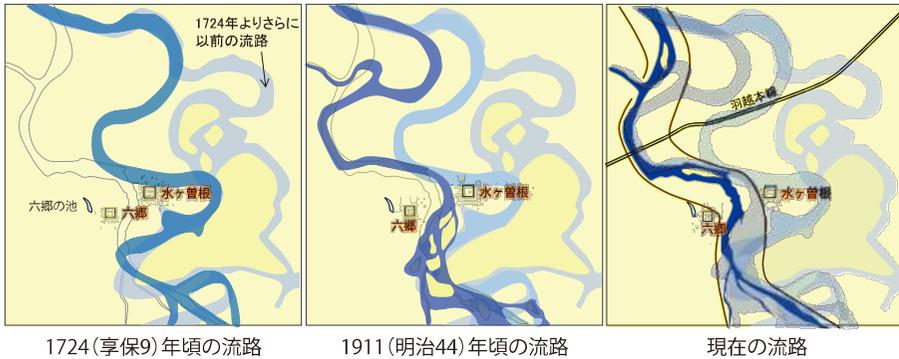


図1 阿賀野川の流路変遷
水害地形分類図デジタルアーカイブ
阿賀野川より作成

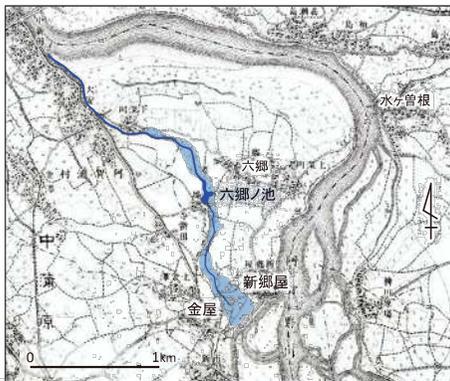


図2 六郷ノ池と派川跡



写真1 カムチャッカ川中流域の蛇行州と派川

北上の池と金巻の池は「押堀」¹⁾であることは既に知られています。そこでここではまず押堀がどのようなものかみてみます。

押堀とは、洪水流によって堤防が決壊し、水が激しく流れ出すことで、決壊地点付近の地面が洗掘されて深くえぐれ、そこに水がたまってできた水域のことです。多くは埋め立てられています、それでも日本の各地に残っており、過去に洪水・氾濫が発生したことを示す痕跡となっています。

近年でも洪水によって堤防が壊れ、押堀が形成された例は多くあります。例えば、2015年9月の関東・東北豪雨では茨城県内の鬼怒川、小貝川などにおいて多くの個所で破堤が生じ、押堀が形成されました。特に鬼怒川の上三坂では氾濫水が自然堤防をも侵食しており、その破壊力のすさまじさを物語ります(写真1, 2)。2019年の東日本台風においても同じ茨城県内を流れる久慈川の支流浅川で堤防が決壊し、上記の小貝側とは違う形の押堀が形成されました(写真3)。

新潟県内でも、2004年7月13日の豪雨によって刈谷田川の堤防が現長岡市中之島で決壊し大きな被害が発生

しました。この時にも10ヵ所をこえる地点で洗堀が生じ、押堀が形成されました²⁾。

押堀は破堤した際の洪水流の流れる向きや、流量、流速などによって、その形や大きさが異なります。水深は1～数m程度のものが多いようです。

押堀は、埋め立てられて市街地となることも多いのですが、このような土地は地盤が悪く、利根川の下流では、2011年の地震の際に液状化が起っています。土地利用に際しては注意が必要です。

- 1) 「落堀」と表記されることが多いが、落堀(おとしほり、おちほり)は本来排水路を意味する言葉でもある。例えば、江戸時代に紫雲寺湯干拓に伴って掘られた水路は「落堀川(おちほりがわ)」と呼ばれている。こうした用語上の混乱を避けるために本ガイドブックでは「押堀」と表記する。
- 2) 安井賢ほか(2004) 2004.7.13豪雨による中之島町市街地の被害と洪水流の流下様式。新潟大学災害研究年報, 26, 33～38ページ。
- 3) 田中規夫・八木沢順治(2015) 河川堤防被害: 落堀・破堤現象の解釈とその規模について。2015年関東・東北豪雨災害土木学会・地盤工学会合同調査団関東グループ速報会。

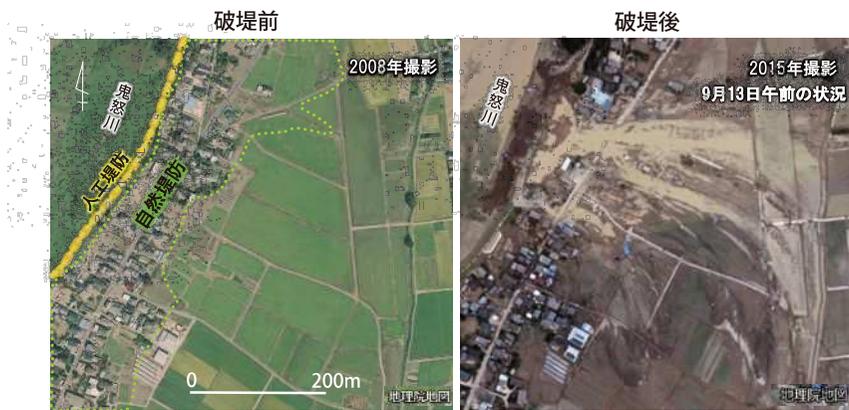


写真1 常総市上三坂付近の破堤前の状況(左)と
関東・東北豪雨(2015年)での同川の破堤後の状況(右)



写真2 鬼怒川の破堤で形成された落堀³⁾
(常総市上三坂付近)

※原資料の表記にしたがって「落堀」としています。



写真3 久慈川支流浅川の落堀

2019年10月17日撮影

北上の池は、能代川下流（北上2丁目付近）の左岸側に位置する面積0.2haほどの池です。

能代川は全長が33.4kmほどの小河川ですが、かつては「九十九曲川」と呼ばれたほど河道が曲がりくねっており、大雨時には水の流が滞って度々氾濫を起こしてきました。北上の池は、そのような河川の破堤によって生じたもので、北上の切れ所とも呼ばれています。破堤は、1734（享保19）年と1819（文政2）年に発生し、それぞれに押堀が形成されましたが¹⁾、前者の押堀は1960年代に埋め立てられてすでに消失しています。

一方、後者の押堀は1962年撮影の空中写真では二つに分かれています、1975年撮影の写真では埋め立てられて一つとなり、これが現在、北上の池と呼ばれています。



写真1 北上の池と能代川の変遷

1948年撮影の空中写真を詳細に判読したところ、図1に示したように池の周囲には最大幅200m、長さ約420mほどの浅い凹地が広がり、その境界は明瞭な小崖をなしていることがわかりました。この小崖と凹地は1819年の破堤の際の侵食で形成されたものである可能性が高いと考えられます。その中でも川に近く

侵食深が大きかった所が後に池となって残存したとみられます。

現在の北上2丁目と下興野町は、能代川によって形成された自然堤防上に発達した集落ですが、両集落は破堤した部分で途切れており、その途切れ方が



図1 押堀(北上の池)形成時の洗掘範囲

いかにも唐突です。実は上述した1819年の破堤以前、ここには5軒ほどの人家があったことがわかっています¹⁾。人家は北上から続く自然堤防上の集落の一部だったとみられますが、破堤によって自然堤防もろとも消失したと考えられます。北上と下興野の集落は、押堀が形成される以前は一続きの集落だったのでしよう。

前項で述べた2015年の鬼怒川破堤による自然堤防の消失と同じことがここでも起こっていたのです。

なお、現在では、河川改修によって能代川の中州だった所が住宅地となり、川と池との距離が125mほど離れてしまっているため、この池が堤防決壊によって形成されたもののように見えなくなっています（写真1c,d）。

1) 加藤辰蔵（1945）新津の口碑伝説、447ページ。三興野郷土史編纂委員会（1984）『三興野郷土史』477ページ。

金巻の池(水戸際池・宮池)

【澤口晋一】

金巻の池は、中ノ口川と信濃川の合流点から3.7kmほど中ノ口川を上流に遡った左岸側にある面積0.7haほどの池です。

黒埼、鳥原、大野町、金巻、木場といった中之口川左岸にあたる地域も例にもれず、水害常襲地で、記録に残る1691(元禄4)年～1868(慶応4)年までの177年間で堤防が決壊したり田畑が池になったりするような大きな水害が22回(8年に1度)発生しています¹⁾。

金巻の池を生じた破堤がいつ起こったかについては、はっきりとしたことはわかっていないようですが、いくつかの資料をあたってみると、1862(文久2)年に木場で発生した破堤による被害が最も大きかったようで、流作田畑の面積は94haに及んでいます²⁾。金巻の池はこの時の破堤の際に形成された押堀の可能性が高いかもしれません。

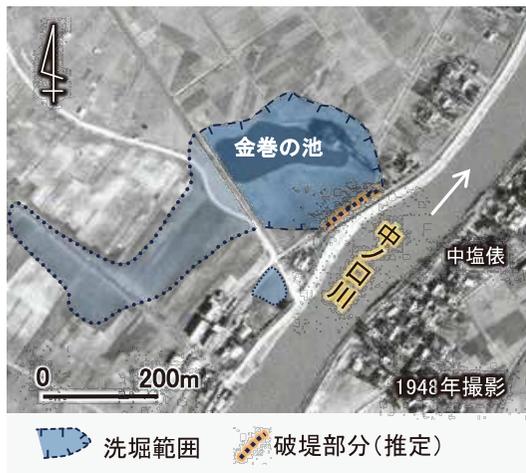


写真1 金巻の池形成時の洗堀範囲

地形についてみると、金巻の池においても、池を取り巻くような小崖地形がやや不明瞭ながら存在することが、1948年撮影の空中写真の判読から判明しました(図1)。この小崖は前述した北上の池と同様、破堤の際の洗堀によって生じたと考えられます。池は洗堀範囲の奥側に位置しています。さらに洗堀範囲から南西側に向かって浅い凹地が続いていることがわかりました。方向から考えて凹地はこの時の破堤に伴って

池を回り込んできた水流の侵食によって形成された可能性があります。

金巻の池は、1948年撮影の空中写真では、長さ約170m、幅約60mほどの大きさで、東側(右側)が細くなる形状をしていました。その後、1958年に中之口川沿いの隣接地に黒埼浄水場が建設され、1971年には浄水場の排泥処理池として池は買収されました。浄水場は2002年に廃止されたことに伴い2004年以降、金巻の池は公園として整備され現在に至っています³⁾。

金巻の池、北上の池ともに小規模な池ですが、大きな洪水の証人でもあり、その意味では後世に残すべき貴重な自然遺産です。

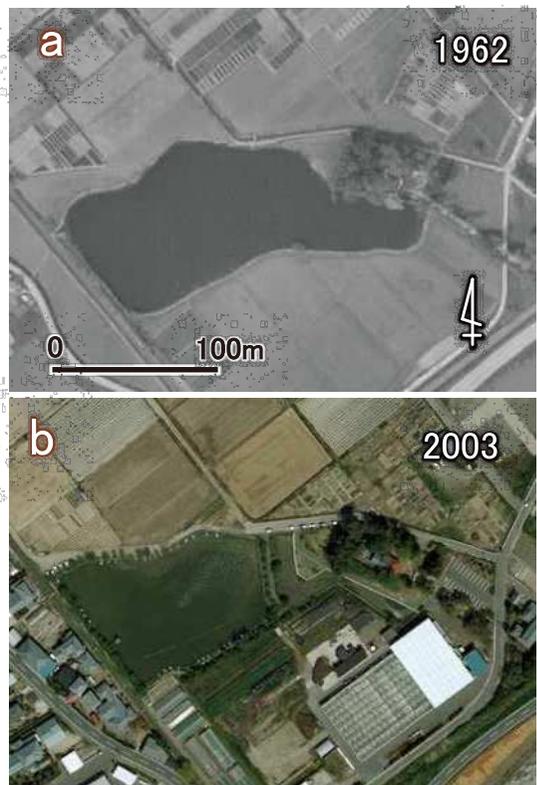


写真2 金巻の池の形状とその変化

- 1) 黒埼町(2000)『黒埼町史 通史編』751ページ。
- 2) 西蒲原土地改良区(1981)『西蒲原土地改良史』上巻990ページ。
- 3) 新潟市水道局(2011)『「水を語る」新潟市水道100年誌』209ページ。

ドンチ池

【澤口晋一】

新潟市西区の内野・中権寺から木山といった集落は広通川や西川の氾濫原よりも5～8mほど高い、バリアー¹⁾と呼ばれる砂層地形上に位置します。バリアーの表面には波の作用によって形成された浜堤という幅数10mの直線的な高まりが9～10列ほど形成されています(図1)。浜堤と浜堤の間は堤間湿地と呼ばれる湿地帯となっており、住宅地となる前には長潟など長さが2km以上に及ぶ細長い潟が浜堤と並行して存在していました。図1の左下に位置する御手洗潟も同じ堤間湿地が湛水したものです。

ドンチ池はこのような砂層地形の東端に位置する、長径123m、短径37m、水深3～4mほどのたまご形の池です。図2は、地形が改変される以前の1947年に撮影された空中写真を判読して作成したドンチ池周辺の地形分類図です。これを見ると、池は⑥と⑦の2列の浜堤とその間の堤間地をまたぐように形成されて

おり、上述した長池や御手洗潟などの堤間湿地とは明らかに異なります。しかも、周囲は池より一回り大きな環状の高まりによって取り囲まれています(写真1、図2)。さらに池に隣接して二つの穴状の凹地も確認できます。これらは、見ようによっては地震の際の液状化によって発生する噴砂跡にも似ていますが、規模が全く違っておりその可能性はありません。

地形的な位置や条件からみて、このような池(凹地)と高まりが自然に形成されることは極めて考えにくいことから、ドンチ池は何らかの目的で人によって掘られたもので、周囲の高まりはその残土である可能性が高いとみられます。なお、高まりの東部分は墓地造成に際して大きく削り取られています(写真2)。

以上のことは、新潟市潟環境研究所研究成果報告書(2017)²⁾において既に述べていたものです。今回、本ガイドブックの作成にあたり、ドンチ池の再調



図1 内野～赤塚にかけての地形分類図

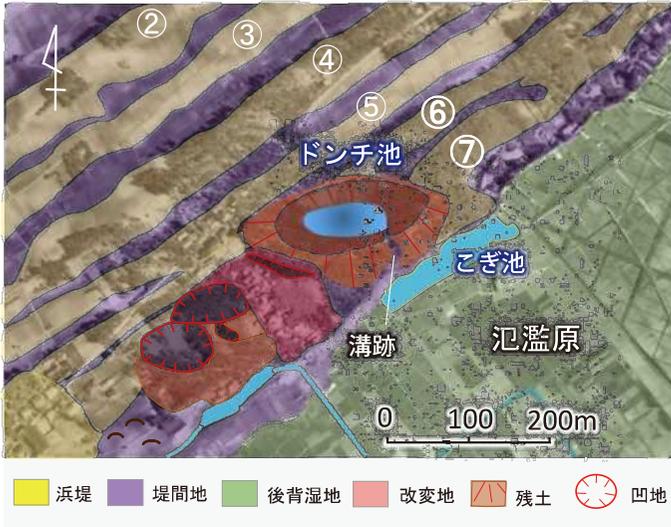


図2 ドンチ池とその周辺の地形



写真1 ドンチ池を取り巻く環状の高まり(氾濫原側・南側から撮影)



写真2 墓地造成のために削り取られた部分
(本来は右手の高まりが左手の樹木の生えている部分に円弧状に連続していた)



写真3 真上からみたドンチ池と灌漑のための溝跡

査を行ったのですが、その過程で地元の方々からもお話を伺う機会を得ました。そこで、中権寺の小田島雄二氏宅に伝わる資料によって、ドンチ池は延享2(1745)年を中心とする数年間に、灌漑のため掘られたものであることが判明しました。水は掘られた溝から後背湿地側にあった「こぎ池」という池に落としていたということです。この溝の跡は現在でも残っています(図2、写真3)。

これまでドンチ池は自然にできたものと考えられてきましたが、以上のことから、人為的に掘られた池であることが確定となりました。

ところで、池をつくるために掘られた深さはどれぐらいなのでしょう。前述したように堤間湿地に相当する部分は長湯の例からもわかるように、地下水面がほぼ地表まで達しています。そうした視点からみるとドンチ池の水体は、東西両端部分が浜堤の高まり部分に及んではいるものの、中心部は浜堤⑥と⑦の間の堤間地の中にあります(図2)。このことは、井戸のように地下水面に達するまで何mも深く掘り下げるといった必要はなかったことを示しています。むしろ、水を多く溜めるために池の底を掘るのに労力を費やしたのではないかと想像できます。

ドンチ池が掘られた1745(延享2)年前後は、福島湯では山本文右衛門の干拓が始まる頃に相当します。

- 1) 沿岸を流れる潮流によって、海岸線から少し離れた所に(海岸線と)とほぼ並行して形成される微高地のこと。ここにみられるバリアーは4600~1400年前に形成されたと考えられる。
- 2) 澤口晋一(2017)新潟市の砂丘地にみられる湖沼とその成因。平成29年度新潟市湯環境研究所研究成果報告書。4~14ページ。

ドンチ池は、墓地側から近づくと急斜面となっておりますので、十分に注意してください。

5潟の動植物相の概要

【井上信夫】

5潟の成因は様々ですが、ほとんどは畑や水田、宅地に囲まれた小規模な湖沼です。かつて干拓による消滅から免れてきましたが、かつての何分の一かに縮小しました。市街地や農地のそばにあり、人間生活の影響を強く受けています。

ドンチ池だけは例外で、鬱蒼とした竹林・広葉樹林に囲まれ、野鳥の渡りの中継地となっています。

5潟の生物相は鳥屋野潟や佐潟、福島潟などの大規模な湖沼と比べて概して単純で、調査もあまり行われていません。



内沼潟 (北区)
かつての福島潟の一部だった



六郷ノ池 (秋葉区)
阿賀野川の派川 ヘラブナ管理釣り場



金巻の池 (西区)
中ノ口川の押堀 ヘラブナ釣り場がある



金巻諏訪神社の池 (西区)
金巻の池とつながる 水草が多い泥深の池



北上の池 (秋葉区)
能代川の押堀 釣りも行われている



ドンチ池 (西区)
バリアー上にあり、周囲は鬱蒼とした林

変化する水生植物相



湖沼に生育する植物は、生息空間や暮らし方によって、いくつかの生育形に区分されます。

- **浮葉植物**: 水面を漂いながら暮らす (ウキクサ・ホテイアオイなど)
- **沈水植物**: 水中で暮らす (エビモ・バイカモなど)
- **浮葉植物**: 水底に根をはり、葉を水面に浮かべる (ヒシ・スイレンなど)
- **抽水植物**: 水底に根をはり、葉を水面上に展開する (ハス・マコモなど)

新潟市域の湖沼で確認された水生植物 (金田・志賀、2017から抜粋)

生育形	浮遊	沈水	浮葉	抽水	合計	現存	確認不可
16潟の記録	13	33	13	79	138		
現存	10	17	9	59		95	
確認不可	3	16	4	20			43
5潟の記録	5	0	2	19	26		
現存	2	0	2	14		18	
確認不可	3	0	0	6			9

追加記録

・金巻の池でポタンウキクサ・マツモ (浮遊) ・スイレン (浮葉) 確認
ポタンウキクサは現在確認不可

・北山の池でホテイアオイ 確認

新潟市域の16潟では、これまで138種の水生植物が確認されています (金田・志賀、2017)。そのうち現在確認できる種類は計95種で、43種は確認することができません。実に31.2%が姿を消しています。5潟では26種が記録され、うち9種が姿を消しました。

水草の場合、水底の泥の中に埋まった種子が生きていて後に発芽することがあります。植物体が見られなくなっても絶滅したと断言することはできませんが、深刻な状態にあることには変わりありません。

減少する在来水生植物 増加する外来植物

古くから成立してきた植物群落では、水深ごとに特有の植物が生育しており、魚類やカエル、水鳥やトンボなど様々な水生動物の生息空間としても重要な役割を果たしています。

しかし、埋立てによって生息空間そのものが消滅し、湖岸が護岸で固められたり、時には水質悪化によって生活ができなくなることがあります。

水生植物がアカミガメやアメリカザリガニによる食害によって消滅、そこで暮らす魚類やトンボなど様々な水生動物が大打撃を受けることもあります。

繁殖力旺盛な外来植物によって生育の場や栄養塩を奪われ、光合成に必要な太陽光を遮られて消滅してしまうこともあります。一部の湖沼では、園芸スイレンによる被害が発生しています。



在来種のヒシ
かつて実が食用にされた大切な水草



在来種のヒメガマ
丈夫な長い葉は民具の素材となった



在来種のマコモ（地方名：ガツボ）
水際に群落を作る大型の抽水植物



南米原産のホテアオイ
アクアリウム プランツとして販売されている。植物体が枯れても種子で越冬する



園芸スイレン
交配によって作られた栽培種であるが、生活力旺盛で水面を覆いつくす



ポタンウキサ「特定外来生物」
熱帯原産で当地では越冬できないが、種子越冬の可能性。過去に金巻の池で見つかる

けっして豊かではない魚類相

越後平野の湖沼ではこれまで66種の魚類が記録されていますが（井上，2015）、5カ所の濁で生息が確認された魚類は20種ほどです。うち在来種はわずか8種で、文字通り水面下で外来種への置き換わりが進行しています。外来種の中には、コイ（飼育型）やナマズ、食用として持ちこまれたカムルチー（雷魚）、ペットのキンギョやヒメダカ（ミナミメダカの改良品種）などが放されたケースもあります。ゲンゴロウブナ（ヘラブナ）やオオクチバス（ブラックバス）は釣り用に持ちこまれ、その他の多くの外来魚はコイやフナ、琵琶

湖産アユなどの放流魚に紛れこんで広がったと考えられます。

六郷ノ池や金巻の池、北上の池ではヘラブナ釣りが行われており、釣り愛好団体によって放流が行われています。5濁の多くは湧水や農業用水の流入がありますが、ほぼ止水状態です。北上の池では2023年夏の濁水時、水温上昇と酸素欠乏で、大量のコイやゲンゴロウブナ、ブルーギルなどが死んで浮きあがったとのこと。



在来の希少なヤリタナゴ



西日本原産のナマズ



琵琶湖原産のゲンゴロウブナ

かつて越後平野に豊産したドジョウも希少種に…

越後平野の在来魚の中で、劇的に減少した魚種はドジョウです。かつて低湿地だったところは膨大な数が生息していましたが、現在はごく稀な存在になってしまいました。5潟では内沼潟と金巻の池で記録はありますが、2024年の調査では1個体も採集できませんでした。全国的にも激減しており、環境省のレッドリストに掲載されるほどです。

かつてドジョウは地域の貴重なタンパク源であり、農家の副収入源にもなりました。亀田郷一帯で捕獲されたドジョウは、亀田駅に集められ、専用の列車で首都圏まで運ばれました。昭和13（1938）年の記録では年間五万貫目（187トン）、金額は九萬円（米価換算で現在の1億数千万円）に達したそうです（亀田郷土資料館）。



梱包されて
亀田駅に集めら
れたドジョウ
(亀田郷土資料館)



カムルチー(雷魚)は悪者か？

カムルチーは、獍猛そうな風貌から雷魚（ライギョ）という呼び名が一般的です。越後平野のほとんどの潟に生息しており、内沼潟、金巻の池、ドンチ池でも確認されています。

大正年間に食用目的に朝鮮半島や中国大陸から持ちこまれた外来魚で、カエルや魚類などを捕食します。魚を食べ尽くしたという「逸話」もありますが、実際には生態系に影響を及ぼすような侵略性はありません。



体側の斑紋が鮮やかなカムルチーの若魚
鰓のラビリンス器官で空気呼吸をすることで有名



その風貌から雷魚と恐れられたカムルチー
全長60~100cm 原産地では重要な食用魚

カムルチーは突進力はあるものの、ブラックバス類のような器用な泳ぎはできず、捕食に失敗することが多々あります。原産地のアジア大陸で日本の淡水魚の祖先たちとともに進化してきた魚種で、これを食べ尽くすほどの大打撃を及ぼすことはありません。むしろ、生態系に甚大な被害を及ぼすウシガエルやアメリカザリガニなどの侵略的外来種を捕食するため、日本の動物たちの役に立っていると考えられます。

◎ 繁栄する両生類ウシガエル:全国の平野部の水域を制覇

ウシガエルは越後平野の潟や下流河川に広く生息し、5潟すべてで確認されています。

オスの独特の鳴き声から牛ガエルと名付けられました。食用ガエルという名前でも知られています。大正年間に北アメリカから食用目的に移入されましたが、現在ではほとんど利用されずに野生化し、全国各地に定着しています。

体長18cmほどまで成長する我が国最大のカエルで、同種を含む様々な水辺、水中の動物を捕食します。ふだん水辺に暮らしていますが、夜間や雨天時に陸上を移動して分布を広げます。

日本の在来生態系に甚大な悪影響を及ぼすため「特定外来生物」に指定され、飼育や放流、生きたままの移動は禁止されています。



上) 水辺で餌動物を待つ 左下) 意外に人気がある
右下) 変態中の幼生は翌年カエルになる

外来カメ類の盛衰・・・クサガメからアカミミガメへ

越後平野で定着しているカメ類は、よく見られるクサガメとアカミミガメ、それにニホンイシガメとスッポンの4種です。

スッポンは食用に生きたまま運ばれることが多く、過去に養殖も行われていて、在来か移入がよく分かっていません。在来種のニホンイシガメは、越後平野の大規模な湖沼で稀に見つかることがあります。ほとんど絶滅状態です。

2024年10月に5潟でカメ類の捕獲調査を行った結果、クサガメ合計81個体、アカミミガメ3個体が捕獲されました。クサガメが圧倒的に多かった点が注目されます。この調査では金巻の池では採集できませんでしたが、何等かの種類が生息している可能性はあります。

湖沼名	内沼潟	六郷ノ池	金巻の池	北上の池	ドンチ池
クサガメ	54	8	0	6	13
アカミミガメ	2	0	0	0	1

カメ類捕獲調査の結果 2024年10月
(カメトラップ3個 一晚設置)



クサガメ（メス）と幼体（右）



アカミミガメ（メス・オス）と幼体（右）
幼体は商品名「ミドリガメ」として販売されていた
(2023年6月1日から販売禁止)

新潟県に生息するクサガメの由来

クサガメは越後平野のほとんどの湖沼に生息し、国内全域に分布していますが、古文書や遺伝子解析により江戸時代末期ごろ朝鮮半島、中国から移入された可能性が高いことが判明しました（鈴木、2012）。しかしながら、データ数は十分ではなく、国内に在来の集団が残っている可能性があるという説もあります。

新潟県内のクサガメの起源を知る、貴重な記録が残されています。大正14（1925）年出版の中村正雄

氏執筆『新潟縣天産誌』です。当時の動植物相の膨大な記録が記載されていますが、イシガメやスッポンは載っているもののクサガメが記載されていません。中村正雄氏は、唯一学名に越後の名を冠したホトケドジョウ *Lefua echigonia* やコシノハゼなどの新種記載に貢献された博物学者で、クサガメを見逃すとは考えられません。当時新潟県にはクサガメは生息せず、昭和の時代になってから持ちこまれたと考えられます。

偏ったカメ類の性比

湖沼名	種名	オス	メス	計	メス%
内沼潟	クサガメ	36	18	54	33.3%
六郷ノ池	クサガメ	0	8	8	100.0%
北上の池	クサガメ	4	2	6	33.3%
ドンチ池	クサガメ	12	1	13	7.7%
上堰潟	クサガメ	123	105	228	46.1%
佐潟	クサガメ	102	362	464	78.0%
	アカミミガメ	138	406	544	74.6%

調査実施年 内沼潟・六郷ノ池・北上の池・ドンチ池(2024年)
上堰潟(2015年) 佐潟(2024年)

今回の5潟の調査および上堰潟（井上、2016）、新潟市が委託実施した佐潟の調査で、カメ類の性比は上堰潟ではほぼ半々なのに対して、六郷ノ池、佐潟ではメス、他の3湖沼ではオスが圧倒的に多いという結果が得られました。

カメ類は岸辺の地中に産卵しますが、その場の温度で性が決定します。ニホンイシガメでは28℃以下でオス、30℃以上でメスになり、周辺に林が多い溜池ではオスが、開けた溜池ではメスが多いという結果が得られています（岡田、2012）。当地の湖沼でも同じメカニズムが働いているようです。

クサガメを圧倒して増加中の北米原産アカミミガメ

アカミミガメは、1960年代から「ミドリガメ」の商品名で盛んに輸入されはじめ、新潟県内にもほどなく持ちこまれたと思われる。本格的な繁殖が始まるのは2000年ごろからで、他種を圧倒しながら増加中です。

5潟ではクサガメが多かったが、佐潟や鳥屋野潟、各地の都市公園ではすでに逆転しつつあるようです。アカミミガメは、2023年「条件付特定外来生物」に指定されましたが、今後の推移が注目されます。

越後平野を代表する哺乳類…エチゴモグラ

5潟で確認された2種類のモグラ

5潟の周辺で目撃されたり足跡や巣穴が確認された哺乳類は数種ですが、ほかにネズミ類の坑道も確認されています。

越後平野で特に注目されるのは2種類のモグラ、なかでも世界中でここだけに生息するエチゴモグラです。2024～2025年の調査で、4カ所の潟周辺で確認されましたが、砂丘地にあるドンチ池ではアズマモグラが、阿賀野川の自然堤防や新津丘陵に近い六郷ノ池には両種が生息していることが確認されました。



越後平野の固有種エチゴモグラ

新潟県レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類 佐渡島に近縁な固有種サドモグラ（準絶滅危惧）が分布



エチゴモグラの分布域（今泉・今泉、1970を改変）

エチゴモグラは、越後平野中心部（新潟市域および近隣市町村の一部）の沖積平野に限定分布している。周辺の丘陵地や海岸砂丘地帯はアズマモグラの分布域で、住宅地や一部の農地、山岳地帯をのぞく広域に生息している。境界部ではエチゴモグラと分布が重なる。見附市～栃尾地区にエチゴモグラが分布しているが、アズマモグラ分布域に取り残された状態である。

湖沼名	エチゴモグラ	アズマモグラ
内沼潟	●	
六郷ノ池	●	●
金巻の池	●	
北上の池	●	
ドンチ池		●



上) アズマモグラ 下) エチゴモグラ

エチゴモグラは日本最大クラスで（頭胴長15～18cm）、アズマモグラ（頭胴長12cm前後）の二回りも大型。坑道の横径はエチゴモグラ5～7cm、アズマモグラ2.5～4cmで、両種の判別は容易。

地下で進行するモグラ合戦！

モグラ類は陸続きの水期に、アジア大陸から何波かにわたって渡来しました。かつてはエチゴモグラとサドモグラの共通祖先が広範囲に生息していましたが、アズマモグラが渡来してこれらを制圧しながら津軽海峡まで北上。次にコウベモグラが渡来してアズマモグラを追撃しながら西日本を制覇し、東日本に分布が拡大中です。地下で日々激しい競争が展開されています。

サドモグラは海峡によって競合種の侵入から守られています。エチゴモグラはアズマモグラとの競合に加えて、都市化の波や農業使用などにより深刻な危機に直面しています。



日本産モグラ類の分布（富山大学横畑泰志氏）
越後平野には2種、新潟県内には4種が分布

5潟の鳥類相とガンカモ類の生活リズム

越後平野は冬期間のガンカモ類の重要な渡来地で、大規模な潟では調査データが集積されています。千葉(2016)によれば、主要な潟の確認種数は福島潟218種(うちガンカモ類26種)、佐潟210種(同29種)、鳥屋野潟188種(同26種)です。5潟の鳥類調査データはほとんどありませんが、佐潟ボランティア

ア解説員の大坂鉄男氏は、ドンチ池で61種(同6種)を確認しています。春・秋の渡りの時期には、さらに多数の野鳥が立ち寄っているものとみられます。

5潟ではガンカモ類は少ないですが、内沼潟にはハクチョウ類も飛来します。



冬鳥のカルガモ 一部は当地でも繁殖



冬鳥のコガモ 小規模な池にも入る



バン 小規模な池でも繁殖している



水田で採餌するコハクチョウ
野性的で人工給餌には集まらない

越後平野では2万羽を超えるハクチョウ類が越冬し、その大部分がコハクチョウによって占められています。主要な餌は水田地帯に豊富に残された落ち穂や水田雑草などで、昼間に水田で採餌し、夜間は大きな潟や阿賀野川などの中州で休んでいます。

一方、カモ類は夜間に採餌し、昼は大きな潟などで休憩しています。カモ類は夜行性と思われるがちですが、実は人間活動が影響した結果です。狩猟圧にさらされてきたカモ類は、警戒心が強いいため、昼間を避けて行動しているのです。ハクチョウ類は長く保護されてきたために警戒心が低下していますが、今でもロシアなどで狩猟鳥とされているガン類は警戒心が強く、人が接近するとすぐに飛び立ってしまいます。

調査不十分な貝類

5潟から4種類が記録されていますが、調査は不十分です。

オオタニシは大型のタニシで、その名前から熱帯地方に住むジャンボタニシ(スクミリングガイ)と混同されることがありますが、全くの別種です。ヒメタニシは平野部の農業用水路やコンクリート製のU字溝にも住んでいます。

二枚貝類は、タナゴ類の産卵母貝となっています。



左下) ヒメタニシ
殻高2~3cm

左上) オオタニシ
殻高5~6cm
準絶滅危惧指定

中上) チリメンカワニナ
殻の表面に多数の縦のすじがある
平野部の下流河川に分布
右上) ヌマガイ殻は丸みをおびる
カラスガイと比べてずっと小型

記録の少ないトンボ類

全県の文献を整理した佐藤の記録(2009・2020)では、新潟市内の潟から50種のトンボが記録されています。5潟では調査が不十分で、20種類程度にとどまっています。



コシアキトンボ
水際近くの水面を飛び回る



チョウトンボ
大きな翅でヒラヒラ飛ぶ



ギンヤンマ
オスは湖面を高速飛行

5 潟に生息するエビとカニの仲間

5潟では、5種類のエビ・カニ類（十脚類）が確認されています。2024年10月に行った現地調査で目立って多かったのは、内沼潟と六郷ノ池のスジエビ、北上の池のアメリカザリガニ、六郷ノ池のモクズガニです。

内沼潟で記録があるヌカエビは捕れませんでした。外来種のカワリヌマエビが内沼潟、六郷ノ池で確認された点が注目されます。カワリヌマエビは中国～朝鮮半島原産で、在来のヌカエビを駆逐しながら増加中です。



六郷ノ池に多数住んでいるスジエビ

湖沼名	内沼潟	六郷ノ池	金巻の池	北上の池	ドンチ池
スジエビ	28	195			
ヌカエビ	△				
カワリヌマエビ	4	1			
アメリカザリガニ	1		△	22	1
モクズガニ		39	▲		

数字は現地調査の捕獲数 △文献記録 ▲過去の確認情報



左) 在来のヌカエビ 右) カワリヌマエビ
カワリヌマエビは、生活力旺盛で増加中
鳥屋野潟や福島潟ではヌカエビと置き換わった



北アメリカ原産のアメリカザリガニ(メス)
様々な水生小動物や水草を食害する
2023年6月1日から「条件付特定外来生物」に指定された



アメリカザリガニのオス
鋏脚が強大



アメリカザリガニの幼体
体色は地味な褐色で、ニホンザリガニと誤解されることもある。ニホンザリガニは北海道と東北地方北部にしか分布しない

海と川・湖沼をめぐるモクズガニの暮らし

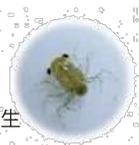


鋏脚に毛が密生したオス

モクズガニは別名カワガニと言い、信濃川や阿賀野川では食用に漁獲されています。甲幅は最大8cmほどで、川や湖沼に住むカニの中では最大です。

秋のころ川を下って沿岸部で産卵し、孵化した子どもは幼生の姿でしばらくプランクトン生活をします。河口に入ってカニの姿になり、川をさかのぼりながら成長します。堰堤などのコンクリート壁も乗り越えることができ、六郷ノ池には阿賀野川から排水路を伝って入り込んでいます。

河口に入った直後の
3mmほどのメガロバ幼生



数十万個の卵を抱えたメス



オスは腹部の形が異なる

参考文献

- ・井上信夫 (2015) 越後平野の湖沼の魚類相。平成26年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書。新潟市潟環境研究所、57～64ページ。
- ・井上信夫 (2016) 上堰潟の魚類相調査報告。平成27年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書。新潟市潟環境研究所、45～60ページ。
- ・今泉吉晴・今泉忠明 (1970) 新潟平野におけるコモグラとサドモグラの種間関係。哺乳動物学雑誌、5(1)、15～18ページ。
- ・内沼潟共有者の会・新潟水辺の会 (2016) 『平成28年度内沼潟魚類調査報告書』。
- ・内沼潟共有者の会・新潟水辺の会 (2017) 『平成29年度内沼潟魚類調査報告書』。
- ・岡田夕季 (2012) ニホンイシガメの温度依存的性決定と個体群間性比の変異。亀楽、3、14～16ページ。
- ・金田風花・志賀隆 (2017) 新潟市域湖沼における水生・湿性植物相。平成28年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書、31～57ページ。
- ・小林浩二・石沢進 (1986) 新潟県：五頭連峰の植物・ドンチ池の植物 (新潟県中権寺) 新潟大生物学部植物分類形態学研究室。
- ・佐藤良次 (2009) 文献から見た新潟県のトンボ相。越佐昆虫同好会特別報告第3号。
- ・佐藤良次 (2020) 文献から見た新潟県のトンボ相 (追補)。越佐昆虫同好会特別報告第7号。
- ・志賀隆 (2018) 新潟の水辺の植物－失われる水辺の植物たち－。『みんなの潟学』新潟市潟環境研究所、36～37ページ。
- ・鈴木大 (2012) クサガメ日本集団の起源。亀楽、4、1～7ページ。
- ・千葉晃 (2016) 新潟平野の潟湖と野生鳥類の生活。平成27年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書、82～100ページ。
- ・中村正雄 (1925) 『新潟縣土産誌』中野財團、新潟。
- ・六郷村史編集委員会編 (2018) 『六郷村史 村の自画像』新潟市秋葉区六郷自治会。

5潟で確認されている主な動物

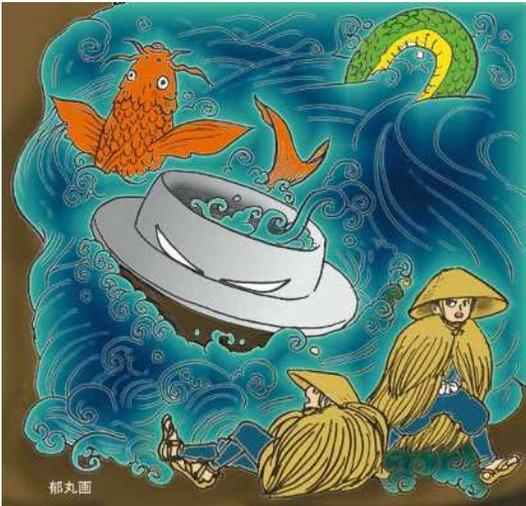
分類群	湖沼名 種名	内沼潟	六郷ノ池	金巻の池	北上の池	ドンチ池
魚類	コイ(飼育型)	△	△	○△	▲	○
	ゲンゴロウブナ	△	△	○△	○	
	ギンブナ	△	△	○△	○	○
	キンギョ				○	
	タイリクバラタナゴ	○△	○	△		
	ヤリタナゴ			△		
	オイカワ	○△				
	ウグイ			△		
	モツゴ	○△	○	△		
	タモロコ	○△	○	△		
	ゼゼラ	△				
	ドジョウ	△		△		
	ギギ	○				
	ナマズ			△		
	キタノメダカ	○	○	△	○	
	ヒメダカ				○	
	オオクチバス		△	△	▲	
	ブルーギル		○		○	
	トウヨシノボリ	△	○	△	○	
	ヌマチチブ			○		
カムルチー	△		○△		○	
両生類	アマガエル	○	○	○	○	○
	ウシガエル	△	△	○	○	○
爬虫類	クサガメ	○△	○		○	○
	アカミミガメ	○				○
鳥類		—	—	—	—	61※
哺乳類	アズマモグラ		○			○
	エチゴモグラ	○	○	○	○	
	ホンドタヌキ	○	○	○	○	○
	ホンドギツネ	○	○			○
	ホンドイタチ	△				
	ハクビシン			○		○
甲殻類	スジエビ	○△	○			
	ヌカエビ	△				
	カワリヌマエビ属	○△	○			
	アメリカザリガニ	○△			○	○
	モクズガニ		○	▲		
昆虫類	トンボ類	4	11	13	2	7
	ミズカマキリ		○			○
	ヒメミズカマキリ					○
	マツモムシ					○
	アメンボ	○	○		○	
	オオミズスマシ					○
軟体動物	チリメンカワニナ			△		
	オオタニシ	△				
	ヒメタニシ				○	
	ヌマガイ				○	
その他	トンボ類は文献記録に 現地調査結果を加えた					※鳥類記録 大坂鉄男氏記録

外来種

○採集・目視・フィールドサイン △文献・聞き取り ▲過去の生息情報

地域とともに育ち、地域に親しまれた潟にはそれぞれの言い伝えがあります。洪水や災害によって位置や形を変えたり、人の手が加えられた潟（池）にも、それぞれの生い立ちを示すように物語が伝えられています。それぞれの潟の言い伝えを見ながら、潟が今の形になっていった歴史に思いを巡らせてみませんか。

北上の池



新津町大字北上きれしよの切所は、享保19（1734）年の破堤、文政2（1819）年の破堤などで段々大きくなり、その後一部は埋め立てられて今の形となったといわれています。

最初の切れ込みのときに、北の方から鉄の大鍬釜（おおつばがま）が唸りながら流れ込んで北上の池の主になったといわれています。その後、蓑亀（蓑を着たように藻の生えた亀）が主になりました。

この亀は甲羅が巾約90cm、長さ約120cmもあったそうです。その後、2mほどの大き

い緋鯉あるじ*が主になりました。緋鯉は旧幕時代から明治30（1897）年ころまで、釣り人が目撃しています。この緋鯉、明け方に水面から1mくらいまで近づきますが、決して姿を現しません。水面近くまで来るとあたり一面に朱を流した様に見えて壮観だったそうです。その緋鯉の仔でしょうか、北上の池から周囲の田圃へ出水のとき、よく入って遊泳していたそうです。そのころ、田貝もよく繁殖して、最大のもは縦60cm、横90cmほどの貝もありました。そんなに大きな貝でも肉は軟らかく、おいしかったそうです。ほかに鯉や鮎・鯰等も沢山いたのですが、新津油田の最盛期に鉍毒ことびとが流入して悉く全滅して暫く何もいない時代がありましたが、鉍毒がおさまると、また鯉や鮎などが繁殖するようになりました¹⁾。また、切所の主は大蛇だなどとも言い伝えられていて、山王さまの前の土手の上に映っている電信柱の影を自転車で踏んだところ、影が動いて大蛇だと気づいたこともあったといえます。川を渡る大蛇を見た人もいたそうです。また、夜分に不用意に通行すると、にわかには前方が真っ暗になって一寸先も見えぬようになることがありました。これは獺のいたずらで、しばらく静かに佇んで心を静めているもとに戻るそうです²⁾。

*緋鯉（ひごい）：観賞用のコイのこと

金巻の池

文久3（1863）年のこと、八郎という家のオジという名前の若者が盲人の老母と暮らしていました。当時、盗賊が村を荒らしていました。

ある朝、六右エ門の家の者が稲ニオ*にワラを取りに行くと、きれいな着物が隠してありました。盗賊が取りに戻ってくるに違いない、と見張っているとオジが近付いてきました。泥棒として捕らえられたオジは「着



物に目が眩んだだけで、泥棒はしていない。知っての通り、家は貧乏なので、この着物を売って母に美味しいものを食べさせたかっただけだ」と必死に申し開きをしました。騒ぎを聞きつけた老母は家の前を出て「罪をかざけられて殺されるのか」と声をあげて泣きましたが村人は聞き入れません。村人は命乞いをするオジを俵に入れて中ノ口川に投げ込みました。一度沈むと、オジは俵を破って岸边へ戻ってきました。まげも切れ、乱れた髪でなおも命乞いをするオジを助けてやろうと言う村人も現れましたが、再び縄で縛られ、川へと放り込まれました。「覚えていれ」という声が聞こえ、俵は水面に消えました。その年、大雨が続いて中ノ口川は増水し、村人の懸命の努力にもかかわらず地藏様の脇の土手が切れました。するとゴーゴーと流れ込む濁流の中に俵が浮かび上がりました。その俵はオジを詰め込んだ俵で、村人の目の前を流れ

て行きました。家や田畑が流され、その年の村人は苦しい生活を送ることになりました。水が引いた跡には大きな池ができました。これが金巻の池（水戸際池）で、人々はオジが池の主になったと思いました。その後、雨が降りそうな蒸し暑い日になると、池の底から「ウォーウォー」という音が聞こえ、村人は「オジが泣いているぞ」と恐れました。昭和40年、村のある女性がオジの夢を見て、方々に寄進してもらってオジを八幡宮の境内に白龍様として祭りました²⁾。

*稲わらを積み上げたもの

六郷ノ池

六郷八幡宮は、六郷村の豪族六兵衛家の守り神で山王原に鎮座していましたが、寛治年間（1087~1093年）に黒鳥詮任兵衛によって六兵衛は滅ぼされ、その守り神の社だけが残されました。寛文年間（1661~1672年）に入って、社のある土地が水害によって流されてしまったために、社は現在地に移転しまし



た。もともと天照大神を祀った祠は以前から上ノ代（現池尻から深川に向かう場所の辺り）に、大月姫を祀った祠は上藪（現上組辺り）にそれぞれ鎮座していました。この三柱

が明治11年に合祀され、六郷村の守護神となりました。春祭りは八幡宮の神事ではなく、天王様の祭りでした。天王様は、疫病を除く神、水の神、作の神として古くから信仰されています。特に六郷ではツツガ虫の厄災から逃れる唯一の方法として祈願されました。天王様の神使は河童であると信じられていて、好物のキュウリの初物を天王様にお供えするまではキュウリを食べてはいけないと言われていました⁴⁾。

内沼潟

内沼潟の主は魚のばけものみたいなものでした。その主は裏の川（駒林川）にやって来て、てんぼこき（嘘つき）や言うことを聞かない悪い子が川端にいと、でっかい口で「アプッ」とあつという間に食べてしまうそうです。親孝行をしていい子にしていれば潟の主はそのことをみんなわかるのでなにもしないといます⁵⁾。漁をしているとカワウソや狐が若い女性に化けて舟の近くにやってくる話や、ムジナを捕まえて舟において置いたら、いつの間にか消えていた、という話も伝えられています⁶⁾。



都丸画

ドンチ池

ドンチ池は、尼池、論地池、などと呼ばれていました。尼池というのは、ドンチ池があったところに、かつて中権寺という寺があって、突然池が出現して寺が沈んでしまったためといわれています⁷⁾。また、南側高台眼下は水田地帯で、耕地の境界に論所土手という囲い土手がありました。ここは水害地帯で、悪水が中権寺の耕地に流れ込み、常に水騒動が絶えませんでした。この悪水を防ぐために、亥高郷*耕地と中権寺耕地の境界に、中権寺耕地を守るために、堤防が築かれました。この囲い土手ができてからも水争いが続いて、水について論じあった所ということで、論所土手と呼ぶようになりました。池山にのぼり、眼下の水害地を眺めながら、悪水処理について論じあったことから、論地池と呼ぶようになったともいわれています⁷⁾。

ドンチ池の主については、大亀だという言い伝えがありました。この大亀は池の底に潜んでいて、村人にその姿を見せたことがありません。ある日、村の子ども達数人が、ドンチ池で泳いでいると、いつの間にか、その中の一人の姿が見えなくなりました。池の主の大亀が呑み込んでしまったのだといわれました。このことがあってから、人間を呑む池、不気味な不思議な魔の池として恐れられ、呑池と呼ぶようになったのだそうです⁷⁾。

ある時、赤塚村会議員の有志で池を干して魚をとろうという話になり、東側の山をたち割り、排水路を作って排水機を取り付けました。二昼夜連続運転したところ、水位が下がってきました。「尼池の主が現れたようだ。晝二枚大の大亀で甲羅をぶかぶか浮かせて泳いでいるようだ」といううわさが広がって見

物人が増えましたが、突然水位が動かなくなりました。排水機の番人も頑張りましたが、四昼夜目の夜、雷雨となったため家に逃げ帰りました⁷⁾。または、ドンチ池はドチの訛りとも考えられました。河童の呼称は処によりいろいろで、ドチ（鼈）という呼称もあります⁸⁾。ドンチの河童は糸毬に化けるようで、道に糸毬が落ちていて、子どもが見つくて拾おうとするとコロコロと転げていき、止まったり転げたりを繰り返して、いつの間にかドンチの池の端まで行って、子どもが池に気づかず毬に近づくと、池から黒い毛むくじゃらの手が出て子どもの足をつかんで池の中に引きずりこんで、尻こ玉を抜くのだといひます⁹⁾。こんなことから、得体のしれない不気味な場所というイメージがついたのかもしれない。



昭和の初めに、若い女性がドンチ池で亡くなるという出来事がありました。その後、新潟方面から木山小学校へ通っていた先生が、夕方バスに乗って帰る時に、池山の方からきれいな女の人が提灯を持って出て来て、手をあげて赤バスに乗り込み、中権寺の往環道へ来ると、バスから下りてすうっと消えたのを見たという噂がたちました⁷⁾。昭和の終わり

には、内野のタクシーの運転手が、中権寺付近で傘をさした女性客を乗せて、国道402号線を走って内野方面へ行き、女性を降ろそうと後部座席を見ると、いつ降りたのか乗っていたはずの客がおらず、座席がぐっしょりと濡れていました。それから、タクシーの運転手は海岸の402号を走るのを避けるようになったそうで、これも尼池の幽霊といわれています¹⁰⁾。不思議な名前と、そのたまたまいから、ドンチ池は現在も神秘的に包まれています。

* 現存する地名ではありませんが、現在のきらら西公園付近の地名であったと思われます

- 1) 加藤辰蔵 (1945) 新津の口碑伝説。三興野郷土史編集委員会 (1984) 『三興野郷土史』 447ページ。
- 2) 山名正平 (1983) 北上・山王堂界限 伝承と聞書 新津郷土誌。10. 58～66ページ。
- 3) 木場の郷土誌編集委員会 (1975) 『越後木場の郷土誌』 202～206ページ。
- 4) 六郷村史編集委員会 (2018) 『六郷村史 村の自画像』 71～88ページ。
- 5) 内沼の昔ばなし編集部 (2018) 『内沼の昔ばなし』 30ページ。
- 6) 豊栄市史調査会民俗部会編 (1999) 『豊栄市史 民俗編』 534～536ページ。
- 7) 吉崎美佐武郎 (1983) 尼池にまつわる話。越後赤塚。2. 8～15ページ。
- 8) 金塚友之丞 (1966) 『蒲原の民俗』 野島出版。285ページ。
- 9) 柳都山人 (1987) 河童の話・中権寺のドンチ池【にいがた夜話】 島屋野出版。63～65ページ。
- 10) 赤塚郷土研究会事務局 (2015) 赤塚の伝説・言い伝え。越後赤塚。26. 23～30ページ。

【4ページの補足】



阿賀野川の早瀬切断と流路変更

地域の関わりや取り組み

六郷ノ池と地域の関わり

【佐藤 譲】

六郷ノ池は旧河道の池で、以前用水として用いられていた下条江の末端に位置しており、用水の残水が流れ込んでいました。そして、池の水はポンプアップされ周辺の農業用水として利用されていましたが、2002年に始まった両新地区圃場整備事業によって用水はパイプ灌漑化され、そのような利用は殆ど無くなりました。

しかし、以前からヘラブナが釣れるということで、釣り人が訪れており、現在では、もっと釣りが楽しめるよう幼魚の放流を行っているので、「ヘラブナ釣りの池」として多くの人々が利用しています。

また、新関コミュニティ協議会が発行した「しんせき夢マップ」にも六郷ノ池が紹介されており、そのマップを用いた新関小学校の児童が「全校ハイキング」や「釣り体験」で利用しています。

六郷ノ池では、所有者が組合として共同で池の管理を行っており、周辺の草刈りやごみ拾い、側溝の泥上げなど行い、利用しやすい環境を維持するよう務めています。



児童の釣り体験の様子

潟風に吹かれながら…♪

【高橋 剛】

内沼潟では1995年から埋め立てが始まりました。その頃から潟の環境は一変し、蓮の華が咲き誇る癒しの潟からゴミ投棄の場となりました。

2010年、潟の共有地権者により、「内沼潟共有者の会」が設立されました。会の目的は、自治会と協働しゴミ投棄の防止・公園化などの問題解決を図るためでした。これを契機に、潟が地域全体に周知されるようになり、2014年以降自治会ニュース等を通して、ようやく地元全体に認知されました。

その後、自治会が潟の巡察を事業化し、「ゴミ投棄の実態」・「監視カメラの設置」・「潟の調査」などを頻繁に報じるようになりました。それらの活動により、2018年頃には地域の宝として「内沼潟」を認識する内沼人がかなり増えたのではないかと思います。

ただ、時代は移ろうもの。諸般の事情から、潟の巡察が数年前からなくなるなど、様々な理由により今では、内沼潟の情報に接する機会がほとんどなくなりました。

2025年現在、地域での取り組みは二つです。一つは、地域の農業者団体が年一度、周辺の草刈りを実施しています。二つ目は、内沼潟共有者の会の活動で、週に二度ほど潟巡察に出かけ、船着き場周辺の草刈り及び川舟での水面散策をしています。これは今後も続ける予定です。

潟風に吹かれながら、潟の歴史やこれらの取り組みを身の丈にあった形で、次の世代に繋げていけたら…と考えています



未来の潟守?と干上がった内沼潟(2021. 5. 8 撮影)

ラムサール条約「湿地都市認証」について



新潟市は、2022(令和4)年11月にスイスのジュネーブで開かれたラムサール条約の締約国会議COP14において、出水市(鹿児島県)とともに国内初となる「ラムサール条約湿地都市認証」を受けました。これは、新潟市の潟をはじめとする豊かな水辺環境や、環境保全・利活用に関する地域の取組みが国際的に高く評価されたものと考えています。

この湿地都市認証は、ラムサール条約に基づき2018年に創設された制度で、水鳥の生息地として重要な湿地を有する自治体(都市)のブランド化や地域における湿地の保全や賢明な利用の促進を目的としています。

認証には潟などの湿地の保全・再生、管理への地域関係者の参加、普及啓発、環境教育等の推進に関する「国際基準」を満たすことが必要で、2025年3月現在、世界27か国74都市が認証を受けています。

新潟市には、信濃川、阿賀野川の2つの大河を

はじめ、ラムサール条約湿地である佐潟や福島潟、鳥屋野潟などの里潟が存在し、水田面積は地域の約44%を占めるなど、水辺環境に恵まれた都市です。その水辺環境の広がる越後平野で越冬するコハクチョウの数は日本一であり、秋から冬にかけてハクチョウや天然記念物オオヒシクイのいる水辺の様子は、代表的な風景の一つです。

世界に認められた「国際湿地都市」として、湿地の保全や賢明な利用の促進を図りながら、新潟市の里潟の魅力を国内外に発信していきます。



認証証書



ラムサール条約締約国会議(COP14)で認証証書を授与される中原市長

代表者のことば

【新潟市里潟研究ネットワーク会議座長・新潟国際情報大学教授 澤口晋一】

新潟市里潟研究ネットワーク会議では、新潟市内に点在する16の潟を湿地都市新潟における大きな宝と捉え、その価値と魅力を主にガイドブックの作成を通じて発信しています。本ガイドブックは、十二潟(2020年)、じゅんさい池(2021年)、上堰潟・仁筈堤(2022年)、佐潟・御手洗潟(2023年)、福島潟(2024年)に続いて6冊目となるものです。このガイドブックでは、新潟市内に点在する5つの小さな潟・池(内沼潟、六郷ノ池、北上の池、金巻の池、ドンチ池)を取り上げました。

こうした小さな潟や池では、ガイドブック作成に足る調査資料が必ずしも十分ではありません。生物分野では特にこれが当てはまります。そのため、井上信夫さんは今回、全ての潟・池において現地調査を実施され、ガイドブックにはその結果が反映されました。

伝説担当の高橋郁丸さんは、5つの潟・池にまつわる話を要領よくまとめてくださり、これまでいろいろな資料に分散していた話が初めて一つの冊子となりました。澤口が担当した地形(生い立ち)については、既刊『みんなの潟学』付表1(111ページ)に記述されてある成因に書き換えが必要となったり、新たな知見が加わったりと一定の成果が得られました。

また長年、保全・管理活動に取り組まれてこられた、内沼潟の高橋剛さん、六郷ノ池の佐藤譲さんには、現在の潟の状況や取り組みについて寄稿頂きました。

今回の1潟4池は、市内16潟の中では小さな存在ですが、本ガイドブックがその価値ならびに現状を知って頂くための一冊となれば幸いです。

◆制作:新潟市・新潟市里潟研究ネットワーク会議

◆地域が主役里潟保全事業 5潟ガイドブック執筆者

新潟国際情報大学国際学部教授 澤口 晋一

生物多様性保全ネットワーク新潟 井上 信夫

新潟県民俗学会理事 高橋 郁丸

◆協力:六郷池組合、内沼潟共有者の会、北区郷土博物館(首部)

※敬称略

六郷池組合代表 佐藤 譲

内沼潟共有者の会幹事 高橋 剛

◆表紙写真(空撮):内沼潟、六郷ノ池、北上の池、金巻の池、ドンチ池